

## インドシナ旅日記-10

シェムリアップの3日目は、まず一ノ瀬泰三が滞在していたプラダック村を通ってバンテアイ・スレイに向かいました。「バンテアイ=砦、スレイ=女」と呼ばれる赤い遺跡です。タプロームは本当は夕闇の迫る時間帯に行きたいですね。今回は入門編ということで太陽がまだ真上にある時間に行きましたが、それでもタプロームの見せてくれる無常感は胸に迫るものがあります。

### 10. 「バンテアイ・スレイからタプロームへ」

バンテアイ・スレイはシェムリアップから少し離れたところにある、割とこじんまりとした遺跡です。

10世紀末に貴族の個人的な祈願によって創建されたヒンドゥー教寺院です。シェムリアップ周辺の歴史的な変遷に見舞われて、ほかの殆どの遺跡がヒンドゥー教から仏教へ、あるいは仏教からヒンドゥー教へと改修される運命を辿っているのですが、このバンテアイ・スレイはヒンドゥー教寺院としての様式とレリーフをしっかりと残している貴重な遺跡だそうです。



メコン河の反乱の歴史を物語るように、トンレサップ湖からずいぶん離れているプラダック村でも高床式の民家が今でも多いようです。



バンテアイ・スレイは確かにこじんまりしたという印象なのですが、それでもヒンドゥー教寺院の要素は全て備えられていて、しかも美しい遺跡でし

この遺跡に使われている石材は赤色砂岩というのだそうですが、これがアンコール遺跡群の多くに使われている灰色砂岩に比べて非常に硬いのです。そのためこの遺跡のレリーフは非常に細かく彫られていますし、野ざらしの状態でもよく往時の姿を残しています。更に赤い土であるラテライトを焼いて作ったレンガも使われていて、全体に赤い色をしています。また、ヒンドゥー教の女神であるデヴァターの像が多く彫られていて、なるほど「女の砦」という名の通りだなあと感心します。

それにしても硬い石を積み上げ、それにこの細かい彫刻を施すのにどれだけの精力をかけたかという

ことに思いを馳せると、面白いことに気が付きました。ヒンドゥー教から仏教へ、仏教からヒンドゥー教への回帰を繰り返した歴史の中で、どうしてこのバンテアイ・スレイだけがヒンドゥー教の様式、ヒンドゥー教の神話を描いたレリーフがそのまま残っているのかということです。

遺跡が当時の王城であるアンコール・トムから離れていること、規模が小さかったこと、アンコール王朝の衰退とともに忘れられ、ジャングルに埋もれてしまったこと、材質が固く植物などによる風化の影響が少



緻密で繊細な彫刻に見入ってしまうとつい時間を忘れてしまいます。

くなかったことのお陰なのでしょう。



わたしは小さな遺跡にずっしりと詰まった歴史的価値に、いささか食傷気味でしたが、相棒たちは元気一杯でした。

に建立された平等院の阿弥陀堂（鳳凰堂）には雲に舞う無数の天女（菩薩）が描かれています。当時の人々の浄土や極楽に対するイメージの共通性を感じます。

わたしにとっての今回のシェムリアップ訪問の二つ目のハイライトは実はタプロームです。他の遺跡がそれなりに綺麗に修復されているのに対して、このタプロームだけは発見当時、ガジュマルの根があまりにも深く入り込んでいたため、修復を諦めてしまいました。現在はユネスコから委嘱されたインド政府が担当して一部の保存のための修復を試みている、大きなクレーンなどが動いているところも見る事ができました。しかし、わたしたち日本人にとっては、この巨大なガジュマルに飲み込まれている遺跡を目の当たりにできることの方が感慨深いですね。ガイドのトム君も「日本人はタプロームが好きですね」と首をかしげていました。

12世紀末に建立された当時は、仏教寺院であり、ガイドブックには当時1万人を超す僧侶やその見習い僧、アプサラダンサーズが住んでいたそうですから、相当大きな寺院だったことがうかがえます。いつからジャングルに飲み込まれてしまったかは調べていませんが東西1キロ、南北600メートルの大伽藍をすっぽりと飲み込んでしまったジャングルの猛威にも感動します。ここより、およそ100年前に建立されたアンコール・ワットよりも、日本人にとってはこちらの方が「祇園精舎」の諸行無常を感じさせるのでしょう。

今となっては、遺跡を破壊しつつガジュマルの根にむしろ支えられているので、インド政府もどこか

「女の砦」と名付けられただけあって、バンテアイ・スレイには全部で12体の女神像が彫られています。アンコール・ワットのアプサラスは水の精ですが、デヴァターというのは女神に相当するクメール語なので、誰か特定の女神を指す言葉ではないそうです。確かにアプサラスには一定の様式があるのに、デヴァターの方は一人ひとり着ているもの、持っているものが皆違っています。

中には王妃を模している像もあるそうです。数十年の

のち、日本の宇治



バンテアイ・スレイでもっとも有名な「東洋のモナ・リザ」を名付けられた微笑みのデヴァターのレリーフ。



全部で16体彫られている女神の中には盗掘によって顔を削り取られた悲しいお姿もあります。人間の欲の醜さを感じてしまいますね

ら手を付けていいのかわからないでしょうね。

ただ不思議なのは、これだけの猛威を見せつけるジャングルが今ではシエムリアップ近郊のどこにもないということです。おそらくは人間の営みによって気候が乾燥化しているのでしょう。カンボジアでは首都プノンペンを除いて、まだまだ煮炊きの火力源は薪や木炭に頼っており、そのために大量の森林伐採がなされています。最近では外貨獲得のために木材を得るための違法伐採も無視できない規模になっているとも聞いています。



インディージョーンズの登場人物を気取っています。でも本当は夕闇迫るころにひとりで物思いにふけてみたいところです。

で高度の技術で栄えた文明で、ついに天空に広い領土を築いた一族です。あまりに高度に発達した文明生活の末に、ラピュタ人は生命力を失って人口を減らし、紀元前 500 年頃に突如奇病が発生して滅亡しています。太平洋の西のいずれの小島の運命を見せられているような気がしますが、日本人観光客がタプロームに感慨深い思いを抱くのも、そんな予感を共有しているからでしょうか。

駆け足でアンコール・ワットとその周辺を回ってきましたが、もう一度、今度はゆっくりと滞在してみたいところでした。それでも、穏やかな表情で暮らしているこの国の人々が、クメール・ルージュ、ロン・ノル政権時代にあの恐ろしい内戦と大虐殺をやっているという歴史の一頁も、わたしの頭から離れることはありません。

廃墟となった天空の城を守り続けていたロボット兵の併せ持っていた凶暴さと従順さを、わたしたち人間も持っているということを滞在中、常に思い起さざるを得ませんでした。

ここタプロームはよく「天空の城ラピュタ」だとされています。ラピュタのモデルはスウィフトの著書「ガリヴァー旅行記 第三章 ラピュタ」ですが、スウィフトはプラトンの失われた地理誌「天空の書」に登場する「ラピュタリチス」をモデルにしました。ラピュタリチスは、かつて地上



どのような修復工事、どのような保存工事が可能なのか、専門家でさえ考え込まざるを得ない状況です。「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」という平家物語の冒頭部分が自然と浮かびますね。



プラダック村付近で木炭を満載したトゥクトゥクを追い越しました。東南アジアから森林資源が消えていく原因の一つでしょう。